

上小島遺跡、芝草・小屋田遺跡出土品について

1. 名 称 上小島遺跡、芝草・小屋田遺跡出土品 一括
2. 種 別 重要文化財(考古資料)
3. 指 定 年 月 日 令和3年4月27日
4. 所 在 地 西会津町新郷大字笹川字上ノ原道上5780番地(旧新郷小学校)
5. 所有者の氏名又は名称及び住所
西会津町野沢字下小屋上乙3308番地 西会津町長 薄 友喜
6. 年 代 縄文時代中期～後期

7. 「上小島遺跡、芝草・小屋田遺跡出土品」について

本件は、福島県耶麻郡西会津町にある上小島遺跡及び芝草・小屋田遺跡から出土した遺物のうち、学術的価値が高いと考えられる土器、土製品、石器、石製品合計 1,248 点を抽出したものである。その内訳は表のとおりである。

遺 跡 名	土器、土製品	石器、石製品	合 計
上 小 島 遺 跡	405	490	895
芝草・小屋田遺跡	265	88	353
合 計	670	578	1, 248

(単位:点)

また、各遺跡の概要については次のとおりである。

(1) 上小島遺跡

「上小島遺跡」は福島県耶麻郡西会津町登世島字塩田、舟場上、馬場下に所在する縄文時代中期初頭から縄文時代後期中葉を中心とした集落跡である。

この遺跡はJR磐越西線野沢駅の北東約3km、東から流入する阿賀川左岸の中位段丘上に立地する遺跡で、平均標高は150mを測る。

当初、小字ごとにA、B、Cの3つの遺跡に分かれていたが、過去の調査や出土・表採した遺物等から同時代の同一集落と判断し、「上小島遺跡」として統合した。

遺跡地には、豊かな水量の阿賀川が隣接しており、そこに注ぎこむ中小河川や湧水地も存在する。また、遺跡地の北側や南側は、野沢盆地を外縁の山々が連なり、これらの山からは、春季のワラビやゼンマイ等の食料となりうる山菜類が採集でき、秋には、各種きのこ類やドングリ、クリ、トチなどを中心とした植物資源が豊かな地域でもある。さらに、遺跡地の周辺は、ツキノワグマやタヌキ等の野生動物が生息し、阿賀川にはコイやフナ等のほ

か、日本海から遡上するサケやマスなどを捕獲でき、食料の自然採集には不自由しない環境である。

おそらく、縄文集落が営まれていた当時も水場や山の幸、川の幸の恩恵によって大集落の維持が可能であったと考えられる。

上小島遺跡の調査については、旧A遺跡は昭和54年(1979)に県営ほ場整備事業により(調査面積約 1,900 m²)、旧C遺跡については昭和59年(1984)、県営ほ場事業西会津第二工区田畑灌漑用水の送水管理設工事により(調査面積約400m²)、それぞれ発掘調査が行われている。旧A遺跡についてはその重要性を考慮し、敷石・複式炉の面で埋戻保存を行った。なお、旧B遺跡は未調査である。

その結果、縄文中期初頭から縄文後期中葉頃までの遺構が確認されている。主な遺構については次のとおりである。

[旧A遺跡]

敷石住居跡4、炉跡24、土器埋設遺構23、集石遺構8、礫群4、灰堆積遺構1

[旧C遺跡]

竪穴住居跡28(うち敷石住居跡4)、土坑72、配石遺構6、焼土2、埋甕4、土器捨て場1

また、上小島遺跡から出土した土器は、縄文時代中期前葉から縄文時代後期中葉までの土器群である。出土土器の分類の結果、確認できた土器の型式は以下のとおりである。

時 期	東北系土器の形式	関東系土器の形式	北陸系土器の形式
縄文中期前葉の土器	大木 7a、7b式期系	阿玉台式系	新保(不明確)、新崎式期系
縄文中期中葉の土器	大木 8a、8b式期系	加曾利EⅡ、EⅢ式期系	天神山(不明確)、馬高(火焰型土器)式期系
縄文中期後葉の土器	大木 9a、9b式期系	称名寺式期系	—
縄文後期前葉の土器	綱取Ⅰ、Ⅱ式期系	堀之内Ⅰ、Ⅱ式期系	三十稻場式期系
縄文後期中葉の土器	十腰内Ⅰ式期系	加曾利BⅠ式期系	—

このほかに「会津型火炎系土器」と呼称される土器や東北系、関東系、北陸系それぞれの文化圏で製作された土器型式の折衷的な要素が強い型式の区別が困難な土器等、豊富で多彩なバリエーションであることが理解できる。

土器のほか、石器も豊富に出土しており、会津地方西部における縄文中期から後期の人々の生活道具類をほぼ概観できる。石斧(磨製、打製)も多く、木の伐採や土堀具として使用したと思われるものなど多彩である。石皿や磨石、凹石の類も多数出土しており、粉食なども盛んであったことが理解できる。また、黒曜石、硬質頁岩、石英等各種石材で製作した石鏃も多数出土している。注目されるのは、軽石製の用途不明石製品である。形状は石斧をかたどったものや端に穿孔しているものもあり、仕掛け網漁や釣りの浮具として使用したものなのかもしれない。これらの石器から狩猟、漁撈が盛んだったことが理解でき、上小島遺跡の出土遺物は、会津地方西部における縄文時代の人々の生活実態を知りうる重要な物証であるといえよう。



(2) 芝草・小屋田遺跡

「芝草・小屋田遺跡」は野沢字浦道添、芝草後、小屋田に所在する縄文時代中期前葉から縄文時代後期前葉を中心とした集落跡である。

この遺跡はJR磐越西線野沢駅の西約1km、阿賀川河成段丘の中位段丘面に所在する遺跡で、平均標高は160mを測る。また、遺跡地の西には阿賀川の支流である安座川が流れている。

これまでの調査は3回行われており、第1次調査は昭和44年(1969)、国道49号線道路拡幅工事によるものであり、敷石住居跡5、敷石遺構4、ピット等が検出された。第2次調査は昭和52年(1977)、国道49号線バイパス新設の工事範囲に遺跡地が該当することとなり、調査を行った。その結果、敷石住居跡や石囲炉、敷石遺構などが確認されている。第3次調査は平成6年(1994)にビニールハウス設置計画があったため調査を行い、竪穴住居跡や土坑50が検出された。

また、芝草・小屋田遺跡から出土した土器は、縄文時代中期前葉から縄文時代後期前葉までの土器群である。出土土器の分類の結果、確認できた土器の型式は以下のとおりである。

時 期	東北系土器の形式	関東系土器の形式	北陸系土器の形式
縄文中期前葉の土器	大木 7a、7b式期系	阿玉台式系	新崎式期系
縄文中期中葉の土器	大木 8a、8b式期系	—	上山田・天神山、火焰型土器、王冠型土器
縄文中期後葉の土器	大木 9a～10 式期系	—	—
縄文後期前葉の土器	綱取 I 式期系	堀之内 I 式期系	三十稻場式期系

このほかに「会津型火炎系土器」と呼称される土器や東北系、関東系、北陸系それぞれの文化圏で製作された土器型式の折衷的な要素が強い型式の区別が困難な土器等、豊富で多彩なバリエーションであることが理解できる。

石器も石鏃、石匙、磨製石斧、打製石斧、磨り石、石皿などが出土し、狩猟や生活で用いたものが多くみられるが、鎌形石製品など用途不明なものもある。



西会津町から出土した縄文土器の学術的価値について

福島県耶麻郡西会津町は会津地方西部に位置し、古来北陸方面や関東方面、東北方面等の3大文化圏が重なる特異な地域である。会津地域には大中小の河川が多数あり、すべて会津地方西部各所で合流して大河阿賀川となり、新潟県境を貫いて西流し、日本海に注ぐ。この川筋沿いを中心として人々は行き交い、各方面と文化交流があったであろうことは、遺跡の分布とそこから出土した土器の系譜から裏付けることができる。さらには南会津町寺前遺跡出土土器のなかに長野県を中心とする勝坂式期系土器破片が数点報告されており、中央山岳地帯ルート(群馬、長野方面)の文化交流があったらしいこともわかってきた。会津地方各地の遺跡から出土した縄文土器の形式を分類すると、大河沿いの「縄文街道」ともいべき文化交流の痕跡がかなり鮮明に見えてくる。

西会津町の上小島遺跡や芝草・小屋田遺跡から出土した縄文土器についても型式分類を行うと、3つの土器文化圏(東北系、関東系、北陸系)が重なり合う会津地方西部に特徴的な縄文時代地中期前葉から縄文時代後期中葉にかけての特異的な土器資料であることがわかる。

また、以前は火炎系土器の特徴的なモチーフである鶏頭冠、鋸歯状文等はこれまでは新潟県が起源と考えられていたが、近年の研究では会津地方西部で醸成されたという可能性

が一段と強まった。このことは、大木7b 式期系の土器口縁部に横S字状の太め隆帯施文が徐々にせり上がり、やがて土器口唇部に達するようになる。この横S字状文はさらにいくつかを組み合わせ、鶏頭冠を形成し、鶏頭冠上や口唇上に鋸歯状文を造出する。この学説を裏付ける資料もまた、西会津町から出土した縄文土器のなかに多数見出すことができる。